



## 定時総会当日に感じたこと

伊東 裕彦 一般社団法人日本エレクトロヒートセンター理事

さる6月5日に開催された当センターの第9回定時総会に出席させていただいた帰り際、事務局の方より「帰りの電車の中でお読みください。」と機関誌「エレクトロヒート」の200号を手渡されました。

お言葉に従い、仙台までの新幹線の中で「エレクトロヒート」を拝読いたしました。1980年の機関誌創刊から200号の記念号ということで、通常の論文に加えセンターのこれまでの活動を振り返る記事や電気加熱技術の今後の展望を示す記事、さらには133号以降に掲載された論文の索引まで付された大変読み応えのあるものに仕上がっていました。

機関誌の創刊された1980年といえば第二次オイルショックの真っ只中、省エネルギーのための技術開発に多くの技術者が真剣に取り組まれたことが偲ばれます。

それから35年が経過し、この間諸先輩が継続して取り組んでこられた省エネルギーに関する様々な技術の恩恵を我々は大いに享受している訳ですが、一方で省エネルギーは未だに社会にとってプライオリティの高い課題であり続けています。(もし諸先輩の努力がなければ一体どうなっていたかなどということは考えたくもない恐ろしい話です。)

200号を拝読し、電気加熱の分野において実現すべきこと・実現できることがたくさんあることを再確認するとともに、継続して取り組んでいくことの重要性についても再認識させていただくことができました。

定時総会当日の話をもう一つ。

今回の定時総会後の懇親会において、センターの第4代会長を務められた進藤純男様と第7代会長を務められた大瀬克博様からご挨拶があり、それぞれがご活躍されていた当時のお話をお聞きすることができました。

お二方のお話から共通して感じたのは研究開発に対する真摯な姿勢とともに、様々な取り組みにあたって常に「世界」を視野に入れてこられた志の高さのようなものでした。

大変お恥ずかしい話ですが、私自身最近のめまぐるしい環境変化に十分反応できず、どうも目先のことにばかり目を奪われ、中長期的な視野でものを考えることができていないことを痛感することが多々あります。

お二方のお話を伺い、高い志を持って継続的に取り組むことの輝きを実感させていただきました。

多くの先人のご努力により、日本が現在の位置を確立したことは論を待たないところですが、ことエネルギー安全保障に関しては引き続き脆弱な位置にあることもまた真実であろうと思います。

供給サイドに我々の努力だけでは如何ともしがたい様々な制約を抱える以上、エネルギーを使う側の工夫は従来にも増してわが国にとって重要な課題であり、当センターの役割も増しこそすれなくなるものではないと確信しております。

甚だ微力ではありますが、中長期的な視野を持ちつつ当センターの会員として誠心誠意取り組んでいく必要を改めて実感した次第です。

(いとう ひろひこ) 東北電力株式会社 お客様本部 副本部長 お客様提案部長